

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「パコパンパの貴婦人の墓」の命名 (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008354

「パコパンパの貴婦人の墓」の命名

関 雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）



金製耳輪を手にしてにっこり笑う

人生で何かに名前をつけるときと聞かれば、ほとんどの人の場合、子供の誕生やペット動物の購入時を思い起こすでしょうが、それだけではありません。今日、命名という行為は日常的になりつつあるといってもよいでしょう。仕事にもよるでしょうが、会社名、新刊雑誌やさまざまなイベントのキャンペーン、レストランやカフェ、商品そのもの名前をひねり出すことを経験した人もいます。また誰もが命名に携われないかもしれませんが、街の通り、運動競技場、そして地震や災害にも名前はつきものです。これはひとえに、一般名詞化された物体や行為を、他と区別し、固有名詞化していくことを目的としています。こうすることで、人々の関心を引き、記憶に残る存在に仕立て上げることができ、場合によっては経済効果も期待できます。分類によってものを認識していく人間の営みはその基盤にあり、それらがグローバル化を含む現代の経済現象と結びついて、これまで以上に敷衍化しつつあるといってもよいのかもしれませんが。もちろん災害の命名は別でしょう。

考古学も、やたらと名前をつけなくてはならない分野です。遺跡の名前、また新しい遺跡ならば、時期名（クントゥル・ワシ遺跡ならば、イドロ期、クントゥル・ワシ期、コパ期、ソテラ期）を考えなくてはなりません。私の場合、今年、これに墓の名前が加わりました。新聞の報道でご存知かもしれませんが、ここ5年ほど発掘しているパコパンパという遺跡で、金製品を副葬した女性の墓を見つけました。当時の社会を率いた宗教的指導者と思われる。墓の発見を公表してからマスコミの取材合戦に巻き込まれました。日本でもペルーでもスクープを望むメディアが名乗りをあげてきた中で、ただ一つの違いがあったとすれば、ペルーの新聞記者が、墓を何と名づけますか、と聞いてきた点です。

日本でも「被葬者は卑弥呼のような存在」という報道でしたが、これではパコパンパに限った名称とはいえません。ペルーの場合、近年では、重要な墓が発見されたとき、命名することが普通になっています。シパン王の墓、カオの貴婦人の墓、アンパト山の貴婦人など、マスコミは愛称を求めてきます。ですから、記者の質問には、「やっぱり聞いてきたな」と思いました。以前、こうした命名には慎重になるべきだというエッセイを書いたことがあり、そのことを思い出しながら悩みました。慎重に考えた末、ペルーの習慣に従うことにし、「では、パコパンパの貴婦人として下さい」と答えました。被葬者は、社会階層が発生した頃の人物であり、また被葬者に敬意を払い、また愛称がつけば、人々の記憶に残り、地元の経済発展にもつながる可能性がある、という意図からでした。では、なぜ命名は慎重になるべきなのでしょう。

私のフィールドである南米ペルーは、古代アンデス文明が栄えた中心地であり、遺跡の宝庫でもあります。ペルー考古学の場合、遺跡の名前には、主に地元の住民に馴染まれた呼称を採用することが多いのですが、その一方で、発見される遺構や区分される時期に命名する権利は慣習的に考古学者に与えられています。たいていは、近くの山や川、特徴的な出土遺物などが参考にされます。ところが、最近では、これがトラブルを起こす原因となってきています。

1999年9月に北海岸に滞在していたときのことで、「南米のツタンカーメン」、「今世紀最大の発見」と言われるシパン王の墓が発見されたワカ・ラハーダ遺跡を抱える村で聞き取り調査をしていると、村のリーダーが不満を漏らすのを耳にしました。金銀の副葬品を納めた豪華な王墓は、ワカ・ラハーダ村にある同名の遺跡から出てきたのに、考古学者はどうして隣接する村の名前であるシパンと名付けたのだらうというのです。実際に旅行者の中には、「シパンの墓を見たい」とタクシーやバスに乗ってやっ

てくるものの、手前の村で降ろされて遺跡まで1キロ近く歩かされることもあると聞きました。

それ以上にやっかいなことがあります。話を聞けば、王墓の発見を機に、観光で村おこしを図ろうと、電気、上下水道などインフラ整備を地方自治体に要請してきたのに、何一つ実らず、援助のほとんどは、王墓の名のもととなった隣村へ届くだけだということです。考古学者がありがたくも自分の村の名前を付けてくれたことを利用したシバン村の村長の政治的手腕の勝利といってもよいでしょう。

もう一つ例をあげてみましょう。10年前に日本にやってきたファニータと呼ばれるインカ時代のミイラを覚えている方も多いと思います。この日本での展覧会にあたっては、地元ペルーで展覧会反対キャンペーンが張られました。ミイラといっても、海岸で発見されるような乾燥ミイラではなく、6000メートルもの高地で冷凍乾燥化した、しかも山の神に捧げられた少女のミイラであったため、保存や輸送の問題が批判の中心でした。

一方で、神に捧げられた神聖な少女の身体を見世物にするのかという意見もありました。これまで日本には数多くのミイラが持ち込まれ、展示ケースでその姿が晒されてきましたが、一度たりとも批判にあったことはありませんでした。なぜファニータの場合、批判が起きたのでしょうか。私は、ファニータという個人名をつけたことにあると考えています。自然科学的分析法が発達し、人身供犠の場面まで復元できるようになると、もはやミイラという一般名詞で語られる存在ではなくなり、ファニータと呼ばれる少女個人の生き様の問題に変わっていったからです。

ファニータの名に関する問題はここにとどまりません。ファニータの命名そのものに注目する批判もありました。この名前は、発見者であるアメリカの人類学者ヨハン・ラインハルトがつけたものでした。彼は、ミイラをあたかも自分の子供であるかのように、ヨハンちゃん、それをスペイン語、しかも女性形に直した上で、ファニータと命名しました。ラインハルト自身は展覧会批判派でしたが、スペイン征服前の社会に生きた人物に対して、キリスト教の洗礼名をつけたことを批判されたのです。展覧会批判キャンペーンの最中に、とぼっちりを受けたこととなります。

いずれにしてもナショナリズムの見方を含め、一連の騒動の背景には、文化遺産を保護より活用を重視しようとしていた当時の政治状況があり、不満を抱く研究者コミュニティがさまざまな方向に爆発したのだと思います。

このように、遺跡などの文化遺産は、考古学者が与える学術的な意味づけによってのみ規定されるものではなく、常に政治的、経済的な状況に晒され、その中に研究者さえも巻き込まれていくのが現代では常識化しています。だからこそ、命名には慎重になるべきなのです。

そういえば日本でも、かつて原人と認定された人骨の年代を見直そうと主張する研究者に対して、遺跡を抱える町の町長が、そんな勝手な判断は許さないと反論を展開したことがありました。あれも確か原人祭りを企画していた町の思惑があつての反応であつたと思います。考古学者が研究にしがみつき、ロマンばかり追い求める時代はとうに過ぎたのでしょうか。文化遺産はだれのものかという問いの答えを得るのはさほど簡単なことではないでしょうが、研究者自身は周囲の社会状況を把握しながら行動することが求められていることだけは確かです。